二月十四日(日).

和田 area で喜多流謡曲の会が催された。京が部隊からの出演者が相当多いので出席した。有難いと思ふ次第からの勉強だけに、格段の進歩であり、久し振りに謡を聴いて愉快を感じた。宝生流の名手であつた父の事を想ひ出して感深い。

謡曲を聴く。(喜多流の観世)

当時、下女から車夫に到る迄一家を挙げ、謡をにはするのみか、出入りの社員迄が父に謡を習つて、実に謡の泡に浮き出た様な感じや、朝四時頃から自室から朗々たる声を聞くや或は月一回の月並会で他世話員が集つて、いかにも晴れやかな場面を示した事と思ひます。或る日、他流の観世流である古市男爵を掴へて、両人共真面目とさつて合奏し、最後迄満足の笑顔を見せたのを覚へてゐる。又晩年には舞を始め、二階の西洋間でドシンドシンとやるので目をむいた事もある。父の命日夜には、当時の一流大家だつた父の師匠野口政吉先生の音頭で、棺前で悲痛な謡が催されたのを、はつきり追想するのである。

僕は宝生流を教へて呉れる人があれば、即座にも稽古し度いと思つて居る。

二月十五日(月).

夜、崎村氏から左の如き報告があつた

大阪で注文中の毛布の件は、軍需部ルでは